



【余土小学校】

<第3学年：見たい知りたい わたしたちの町 松山>

余土小学校には、余土地域の歴史を学ぶための副読本「わたしたちの余土」や教材玩具、かるた「余土めぐり」がある。1学期は、これらの教材を使って地域の歴史や先人の業績を調べ、ふるさと余土に対する理解を深めた。2学期には、余土地域から松山全体へと視点を広げ、松山市の歴史や文化財に触れる松山探検を行った。松山城や子規堂、商店街を見学する中で、実際に足を運び、その様子や特色について、五感を通した課題解決学習を進めることができた。調べたことは、ロイロノートを活用して発表資料にまとめ、その成果を伝え合った。また、3学期には、余土や松山の歴史に対する自分の思いや考えをかるたに表し、自分たちの余土かるたを作って発表した。これらの活動を通して、地域への愛着を深めるとともに、郷土を誇りに思い、ふるさとを大切にしていきたいという態度を育むことができた。



<第4学年：共に生きる>

子どもに障がいとは何かを考えさせ、障がいがあるということは、特別なことではなく、自分にも関係があるということに気付かせる学習を行った。ゲストティーチャーの話の聞いたり、実際に車椅子やガイドヘルプ、点字や手話などの福祉体験をしたりする中で、障がいのある人とのよりよい関わり方について学んだ。福祉体験の後、さらに知りたいことを調べて、バリアフリーの観点から、よりよい町づくりについて考えを広げた。まとめたことを紹介し合い、これからの自分の生活や人との関わり方に生かしていこうという気持ちを高めることができた。また、共生の大切さを実感し、今回の学習を通して人権意識を高めることができた。





【余土小学校】

<第5学年：米はかせになろう>

余土の先人である森盲天外著「一粒米」の話から米づくりへの思いが芽生え、課題を設定し、土づくり、田植え、中ぼしへと活動を進めていった。子どもたちは、小さな種もみから少しずつ生長し稲ができる様子に驚きながらも、米づくりの大変さを感じ取っていた。収穫を迎えた際には、わくわくしながら刈り取りをし、一粒も無駄にしたいと大事に脱穀を行っていた。苗を育てる直接体験や友達との探求・表現活動を通して、子どもたちは、思考錯誤しながら稲を育てつつ、スパイラルに問題解決活動を繰り返していった。さらに、米づくりに携わる方への感謝の気持ちから、食生活を見直し、日常生活に生かしていこうとする姿が見られた。バケツ稲は自然条件や環境など、様々な要因が影響するため、よりよく生育させるための手立てが、今後の課題である。



<第6学年：自分の未来、世界の未来について考えよう>

本単元では、働くことの意義について調べたり、ゲストティーチャーの話を聞いたりして、働くことよさについて考えることを通して、自分の生活の在り方を見直し、夢や希望をもって生きていこうとする子どもを育てることをねらいとして活動を行った。



9月には、日本ユニセフ協会の職員の方による特別授業が行われた。動画や写真を通して、多くの子どもが難民となっていること、家族のために働く子どもが世界でたくさんいることなどを理解し、日ごろ目にしているニュースを自分ごととして考えることができた。また、ネパールの子どもたちが水汲みに使っている水がめを持つ体験活動を行い、水不足などで子どもの命や成長が脅かされていることや、小学校に行けない子どもたちがいることを、具体的に理解した。特別授業を通して、「世界のことに関心を持ち続けたい。」「自分にできることをしていきたい。」など世界平和や戦争についての考えを深め、SDGsに関する活動に進んで取り組もうとする意識を高めることができた。